令和５年度（2023 年度）第１回「北海道史への扉」編集小部会議事録

日　時　令和５年８月 21 日（月）10：00～10：45
場　所　北海道立道民活動センター（かでる２・７）６階　630 会議室
出席者　平野友彦小部会長、奥田仁委員、小内純子委員
事務局　鳥井文書課長兼道史編さん室長、立澤主幹、最上主査、吉原主査、高桑主任

１　開会
２　議事
（１）『北海道史への扉』第４号について
（２）『北海道史への扉』第５号について
３　閉会

1　開会

鳥井文書課長兼道史編さん室長

○それでは時間になりましたので、ただいまから令和５年度第１回「北海道史への扉」編集部会を開催いたします。

○私は道史編さん室長の鳥井と申します。よろしくお願いいたします。

○本日、委員３名全員の出席をいただきまして、開催要件を満たしていることをご報告いたします。早速議事に入りますが、今後の進行については、平野小部会長よろしくお願いいたします。

平野小部会長

○暑いところご出席いただきましてありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

2　議事（１）『北海道史への扉』第４号について

平野小部会長

○それでは、議事に入ります。本日は、次第にありますように、『北海道史への扉』（以下、『扉』と略記する。）第４号、それから第５号について、ご意見を伺いたいと思っております。

○まず、第４号は今年の３月に発刊しましたけれども、論文と資料紹介各１編、余録４編で構成しております。

○論文のテーマは北海道の政治史についてですが、これは研究分野がそれほど広がっていない分野なので、そこを井上委員がかなり細やかに研究されていて、非常に面白い内容になっていると思います。そういうことで、第４号でも論文を掲載することができました。これからもこのような論文がたくさん集まってくるといいなというふうに思います。

○それから、私の資料紹介は『扉』第１号に掲載した研究ノートの続きのような形です。余録の方は奥田委員にも執筆いただいたのですけれども、非常に内容が面白いものが集まっておりまして、読み応えがあったなという印象を持ちました。

○第４号をお読みになりまして、ご意見等はございますか。奥田委員、何かございますか。

奥田委員

○『扉』は、紙版ではどこかに配布していましたか。

吉原主査

○道立図書館のホームページの北方資料デジタルライブラリーに掲載しています。

奥田委員

〇道立図書館で紙版を保存しておくということは行っていないのですね。

吉原主査

〇デジタルライブラリーで掲載すること自体が資料保存の役割を果たしていると思います。資料展示の際に紙版を自由にお持ちいただくようにしていることはありますけれども。

奥田委員

〇それでは道立図書館の書庫の中にはないのですね。

〇道立図書館には資料調査でいろいろお世話になりましたし、紙版がなくてデジタル版だけで大丈夫だろうかと、道立図書館くらいには１部あった方がよくないかなと一瞬思ったのですけども。道立図書館で保存するとなると、中性紙か何か、劣化しない紙に印刷する必要があると思いますが、紙版を保管しておかなくていいのかなということをちょっと感じたのですけれども。

平野小部会長

〇いいご提案だと思います。確かに紙媒体であった方がいいという気もします。紙媒体で道立図書館に寄贈して長期間保存するというようなやり方ができたらいいかなと思いました。

奥田委員

〇将来的に考えて、次の道史編さん作業のときにもちゃんと使えるということであれば、デジタルライブラリーだけでもよいかもしれませんが…。

立澤主幹

〇デジタルライブラリーに資料を掲載することが、道立図書館にとってどういう受け止めになっているか（所蔵の扱いが紙媒体と変わらないのか）確認し、ご意見に対応していくような形にしたいと考えております。

奥田委員

〇道立図書館の蔵書検索で、デジタルライブラリーに掲載されているものは検索できたでしょうか。

小内委員

○（デジタルライブラリーの資料は蔵書検索では）アクセスしにくいようです。
○第１号から第４号まで、簡易な製本でいいので、気軽に手に取ってパラパラと読めるように置いてあるといいかなと思います。

平野小部会長
○検討していただいて、いい方法を探していただきたいと思います。

鳥井文書課長兼道史編さん室長
○わかりました。

平野小部会長
○小内委員、何かございますか。

小内委員
○非常に充実していて、平野小部会長の資料紹介については早速、参考にさせていただきましたし、奥田委員の時期区分についても非常に参考となり助かりました。いい号だと思います。

平野小部会長
○ありがとうございます。では、第４号については大きな問題はなかったということで、内容についてもある程度充実していたということでまとめさせていただきたいと思います。事務局にもお世話になりましてありがとうございました。第５号もよろしくお願いします。

２　議事（２）『北海道史への扉』第５号について

平野小部会長
○それでは、二つ目の議事としまして、第５号への取組について、事務局の方から説明をお願いします。

鳥井文書課長兼道史編さん室長
○お配りいたしました資料２＿１をご覧いただきたいと思います。
○１番、全体のスタイルとありますが、スタイルについてはこれまでどおりとしたいと思っております。
○２番の（１）、論文等の執筆につきましては、現在のところ、前田委員が、連載の形になりますけれども論文を執筆する予定であると伺っております。本日、それ以外の論文等をどのような構成として、依頼や募集をしていくかについてご検討をお願

いしたいと思っております。

○資料２＿２も合わせてご覧いただきたいのですが、今年発行しました第４号の場合は、１の「研究論文・研究ノート」から４の「担当分野の構想」に関するところまで、原稿を募集いたしました。５の「余録」につきましては、それまでの部会ごとの執筆状況を踏まえまして、前近代小部会、近現代小部会、教育小部会に各１名の執筆者の推薦をお願いしたところです。また、『北海道現代史　資料編２（産業・経済)』の刊行時期に重なりましたため、編さんを担当いたしました産業・経済部会の中から、資料紹介などの原稿をいただけないかということで、産業・経済部会長から部会内にお声掛けしていただきまして、結局、奥田委員が「余録」を執筆されたということになっております。

○さらに第３号まで２の「資料紹介」や３の「調査報告」等の寄稿がなされなかったこと、また第４号の募集でも応募があったのは、論文のみであったということも踏まえまして、平野小部会長が「資料紹介」を執筆することになりました。

○第５号につきましても、現在編さん中の『北海道現代史　資料編３（社会・文化・教育)』(以下、『資料編３』と略記する。）と同じ時期の刊行になりますので、そういったことを踏まえて、募集の仕方等について協議していただきたいと思っております。

○資料２＿１に戻りまして、（２）の編さん活動報告、（３）の編集後記などにつきましては、これまでどおり、編集後記は平野小部会長から、それ以外は事務局で担当したいと考えております。

○一番下、３のスケジュールでございますが、原稿の募集・依頼は９月中旬までに行いまして、原稿の締め切りは令和６年１月末、この資料で１月 30 日と書いていますが 31 日の誤りでございます。失礼いたしました。編集しまして配信の開始は３月 25 日としたいと考えております。

○資料２＿２のこれまでの分担状況と合わせまして、第５号についての執筆者の検討をお願いいたしたいと思っております。

平野小部会長

○ありがとうございます。それでは、第５号につきまして、全体のバランスとしましては、従来どおり、「論文・研究ノート」、「資料紹介」、「調査報告」、「担当分野の構想」、「余録」で構成していきたいと思っております。このことについて問題ございませんでしょうか。(意見を述べる委員なし)

○それではそういう方向で進めたいと思います。論文につきましては、前田委員が前回連載をストップしまして、その続きを執筆していただける予定であるということです。

○そのほか、多分、委員の皆さんもご自分で何か書かれているものがあるかと思いま

すので、これについては全委員に対して投稿を呼び掛けるということをしていきたいと思います。呼び掛けして待つしかないわけですけれども、今後どのような形で呼び掛けをしていくか、何かいいアイディアがあればご紹介いただきたいと思います。

○それから「資料紹介」や「調査報告」についてですが、第４号まで発行してきて書いていただけなかったのが「調査報告」です。私としましては、「資料編」の刊行に向けて、これまで、資料の収集には本当に大変な努力をされていることを見て、よくわかっておりますけども、調査に当たってお持ちのいろいろな情報等を、『扉』でもお知らせいただくとありがたいなという気がしておりまして。第５号で執筆していただけるとありがたいなと考えております。これについては、一つ、「調査報告」として書いていただけそうな方がいらっしゃるというお話を聞いておりますので、ひょっとしたら「調査報告」として出していただけるものがあるようです。ほかにも、こういうことで書いていただけるのではないかという方がいましたら、声掛けをしていただけたらありがたいと思うのですけれども。奥田委員、いかがですか。

奥田委員

○「調査報告」のイメージがなかなかわかりにくい。どこに行きました、何を調べましたという報告を書くということでしょうか。

平野小部会長

○『扉』に掲載している編さん活動報告の方では出張先などは記載していますよね。

立澤主幹

○はい、『扉』の巻末で出張先は一覧にして掲載しています。「調査報告」ではどのような調査をしてきたかというようなことを執筆していただくイメージです。

奥田委員

○どういう感じで書いたらいいかわからないと思うので、雛形があるといいと思うのですが…。他のところで「調査報告」という形のものはあまり見たことないのですけれども。

平野小部会長

○私が関わっていた旭川市史では、『旭川研究　昔と今』という機関誌があり、その中で出張の報告を掲載している（「史料探訪」）のですが、どこでどういう資料を見て、その資料はこういう内容の、非常に有益な内容であったという資料の評価等も書いていました。

奥田委員

○執筆していただけるかもしれない方がいらっしゃるということですけれども、それも同じようなイメージなのですね。

立澤主幹

○前近代小部会で、新たに見つかった、松前藩に下された朱印状の調査を行っています。「資料紹介」というと資料そのものに特化した形だと思うのですが、「調査報告」という形になりますと、平野小部会長がおっしゃったような、どこに行って、相手方はどのような方で、どういった資料を見てというような、これまで、『扉』では例がないのですけれども、「調査報告」という形でまとめていただけそうな調査を行っており、このことを念頭に置いているところでございます。

奥田委員

○御朱印状は、確か報道されましたね。

平野小部会長

○発見されたのは北九州でしたか。

立澤主幹

○北九州の方で所蔵があったということです。

奥田委員

○産業・経済部会では、そういう内容での「調査報告」はなかなか難しい。

小内委員

○政治・行政部会では、沖縄などに行っていませんでしたか。

立澤主幹

○政治・行政部会は、北海道・沖縄開発のように、並列的に政策が取られたため、道外にも資料があるということで調査を行ったところでありますので、「調査報告」として書いていただくことができるかもしれないと思います。

平野小部会長

○執筆をお願いしてみていいでしょうか。

立澤主幹

○特徴的なものがあれば良いと思いますが、ただ、調査を行った前田委員が、第５号に論文を執筆される予定なので、タイミングとしては第５号よりも後という形になるのかもしれません。

平野小部会長

○「調査報告」についてはそういうイメージがありまして、できれば、刊行する「資料編」にそって何か報告があればいいかなと思いますので、ちょっと頭の片隅に置いていただきたいと思います。

○次に「余録」につきましては、資料２＿２を見ていただければと思いますが、これまでも、産業・経済部会は３回、他の部会・小部会は２回ずつ、ある程度満遍なく執筆していただいております。第５号では、どこにお願いしようかということなのですが、小内委員の社会・文化小部会でお願いできないでしょうか。一つの小部会で２つ書いていただいても結構なのですが…。

小内委員

○『資料編３』の解説文で紙幅の関係で書き込めなかった委員に書いていただくのはどうでしょう。

立澤主幹

○『扉』は「資料編」を直接補うような性質のものではありませんが、「資料編」の紙幅も限られておりますので、もし、言い足りない部分ですとか、これは先ほどの「資料紹介」の話になるのかもしれませんが、資料調査の報告などがあれば、平野小部会長もおっしゃいましたように、是非、社会・文化・教育を中心に、「余録」だけに限らず、『資料編３』に関わるものを書いていただければと思います。

○まずは全委員に投稿を呼び掛ける一方で、例えば、その際に、横井教育小部会長、小内社会・文化小部会長に、『資料編３』が刊行されるのに関連して、紙幅の関係で割愛したようなことですとか、調査に行って印象に残ったようなことを書いていただける方を特に募集していますというような形で一文を添えていただいて、募集をかけることができれば良いと思います。

○第４号の原稿募集に当たっては、産業・経済部会の坂下部会長の方に同様のことをしていただいていたと思いますので、それでもし手を挙げていただけないということになれば、個別にお願いするという進め方でいくと、『資料編３』の刊行を見据え、機関誌としての役割をより強調していけると考えています。

平野小部会長

○全体として募集して、最終的には、社会・文化小部会、教育小部会、それから、政治・行政部会の方で、別枠で肩たたきをお願いするというように進めてみたいと思います。ちょっと漠然とした形ですけれども、第５号についてはそのような形で原稿をお願いしていくという形で進めてよろしいでしょうか。（意見を述べる委員なし）

○ではそのような形で進めたいと思います。閲読もお願いすることとなりますので、その際はよろしくお願いします。

○ほかに第５号についてご意見などがございましたらお願いします。（意見を述べる委員なし）

○論文の執筆について、原則として道史編さん委員会に所属する委員に投稿していただくことになっているのですが、『扉』執筆要領では、外部への執筆依頼は必要に応じて行うということになっています。当面は編さん委員会の委員に執筆していただく方向で進めていきますけれども、編さん過程の中で、この分野についてはこの方に大変お世話になっていろいろとご意見もいただいているということがあれば、その方にお声掛けをして、論文・研究ノートなどを執筆いただきたいというようなケースも出てくるかと思うのですけれど。今後論文の投稿が滞ったりすると、どうしようかということになると思いますので、そのときには外部の方にお願いする手立て、執筆要領の内容を検討しなければならないところが出てくると思います。それをちょっと頭に入れておいて、今後の『扉』の編集について考えていきたいと思います。外部にお願いするということについて、奥田委員はどんなふうに考えますか。

奥田委員

○『扉』では、外部の方が執筆した論文はなかったですよね。『新北海道史』の機関誌『新しい道史』では、確か、委員ではない方も執筆していたのではないかと思うので、委員以外の方にお願いしていいのではないかと思います。もちろん我々も責任をもって閲読はさせていただかなければいけないのですけれども、執筆していただくということはあっていいのではないかという気がするのですけれども。

平野小部会長

○小内委員はどう思われますか。

小内委員

○北海道史に関わる内容であれば問題ないと思います。

平野小部会長

○題材が北海道史の編さんに関わるということで、依頼の際に間に入っていただく方には趣旨を理解していただいたうえでお願いするということで、そのときに、投稿の要件というか、こちらの方で用意するものを整えておかなければいけないと思います。

○以前、『扉』に投稿していただくときに、査読の有無が研究業績に大きく影響するので、『扉』への投稿には躊躇があるのではないかということがありましたので、外部の方にお願いした時に、『扉』の執筆要領の中で、投稿することによってどんな利益があるのかがわかるようにしておくことが必要かと思いますが、その辺について、奥田委員、何かご意見はありませんか。

奥田委員

○資料３の執筆要領では、外部への執筆依頼は必要に応じて行うということで、一応執筆依頼ができる形にはなっているのですよね。その場合の査読といいますか、閲読といいますか…。ここでは閲読という言葉を使っていましたか。

立澤主幹

○去年の議論で申し上げますと、懸賞論文等のように査読委員会を設置し査読を行うというのは体制的にも難しいですし、道史のＰＲをする機関誌という範疇を超えてしまうという考えもありまして、最終的には執筆要領には閲読という言葉は使わないで、「完成原稿」を提出していただくという形で整理しました。

○北海道史に関わるテーマについて、委員もしくは部会の方からこの方が適任ではないでしょうかというご意見があった方に対して、平野小部会長からお話があったように、例えば査読は付いていませんとか、原稿料はこれだけですという形で、条件を了承していただいて依頼する必要があると考えております。

奥田委員

○昨年度の議論の経過を思い出しました。学会誌の査読と全く同じ形をとると、査読体制を独自に敷く必要があり、外部の査読者を依頼してそれなりの報酬も支払わなければいけないというような形を取っていくのは困難だということだったと記憶しています。

○これまで、我々３人は、専門外の場合もあるし、特に小内委員のように現職の方はなかなかお忙しくて、負担も大変だということはあるわけで、ただそうは言いながら、編集小部会として責任を持たなければならないということでございまして、原稿を読ませていただき、意見を差し上げるという形でやっておりましたよね。そして、この部分については表現をもう少し補強していただいた方がいいといったことは執筆者にお願いして、そういう意味では、いわゆる査読体制ではなかったですけ

れども、査読に近いことを実質的には行っていたというふうに思います。やはり、外部の方にも、投稿いただくということになると、やはりその辺のことは、単なる懸賞論文のように採否を決定して終わりということにはならないので、多少この辺について補強していただきたいとか、論点が少し不明確なので明確にしていただきたいとかいうようなことも含めて、何らかの編集小部会として責任を持てるような作業をしなければいけないだろうなというふうには思います。それを査読という言葉を使うかどうかという問題もありますけれども、だから、前回の議論のように、外部の専門の方にお願いして査読委員会を開いてという体制をとることは、予算上の問題もあってできないということになれば、その辺をどうするか。そして平野小部会長がおっしゃるように、それを執筆要領でどのように記載するのかという。例えば、院生の方ですとか若い研究者の方々が業績として出していくときには査読付きであればそれに越したことはないのですけれども。

小内委員

○執筆者の年齢にもよるでしょうから、難しいですよね。査読付きかどうかは、若い方なら確かに重要でしょうが、関係ないという方もいますよね。査読付き論文を目指さなくてもいいと思うのですが、ただ、ノーチェックで掲載されるということではなく、多少書き直していただくこともありますというようなことは言っておいた方がいいと思います。

奥田委員

○わざわざその専門分野の他大学の方に報酬を支払って、査読を頼んでいる大学もありますが、そこまでやっていないところも結構あるのではないかと思います。

小内委員

○博士論文の場合、研究業績実績として、査読付き論文が何本と、査読付きといってもレベルがあって、全国学会誌何本とかあるのですけれども、『扉』はさすがにこういうレベルにはカウントされないのではないかと思うのですよね。

○ですから、あまりこだわらずに、もう少し気楽に書いていただいていいのではないでしょうか。年齢が上の方にお願いする分には、査読付きかどうかにはこだわらないと思います。

平野小部会長

○執筆要領の４の（６）に、「提出された原稿は、編集小部会において内容の確認を行い、必要に応じて執筆者に修正を求める」とあります。この原則で、外部の方にもお願いし、『扉』に対する外的評価は、相手方にお任せするということで、こちらの

ほうからはあえて査読という言葉は使わないで、こういう形でお願いするのですけれどもご了解いただけますかということで、そういうことで進めてみたいと思いますので、現在の執筆要領に基づいて、必要に応じて外部でお願いするときも、こういう条件でお願いするという形でやっていきたいと思いますので、もし、そういう必要が生じたら、各部会長・小部会長からも声掛けをしていただいて、道史に関する何かのテーマについて専門的にやっている方について示唆していただくというような手段をお願いするかもしれませんので、そのときは、またよろしくお願いします。

○第５号につきましては、これまでの方針で進めること、外部にお願いすることになった場合も、これまでの執筆要領に従ってお願いするということでよろしいでしょうか。（意見を述べる委員なし）

○はい、ありがとうございます。では、こちらの方で用意した議題は以上になりますが、そのほか、全体をとおして『扉』についてご意見等ありましたらお願いしたいと思います。ございませんでしょうか。（意見を述べる委員なし）

○では、またこの体制で、来月、原稿についてご検討いただくことがあると思いますので、よろしくお願いします。

○事務局から何かございますか。

鳥井室長

○ございません。

３　開会

平野小部会長

○それではこれで終了します。どうもありがとうございました。